



卒業パーティーにて。左から2番目が筆者。インドネシア、スワジランド、韓国、インドネシアの友人と

節目節目で何かに挑戦するたびに呼び起され、私にエネルギーを与えてくれる。

二つめは、UWCの多様性、さまざまな文化の価値観である。UWCの学生である以前に、一高校生であるわれわれの集合体は、「交換留学」や「異文化交流」体験よりももっと人間臭く、高校生同士の真剣な交わりだったと思う。お邪魔します、と足を踏み入れるのではなく、のぞき見をするのではなく、派遣された生徒それぞれが能

動的、主体的にUWCのカルチャーを受け継いでいくコミュニティなのだ。部屋の電気は一番最初に寝る人が消すか最後の人が消すべきか、程度の日常的なことから対日関係や貧困問題まで、仲間と話す内容は何でもありだ。些細なことと時事問題の両方を話すことで私たちは絆を深めていったと思う。何より、知らない国のことをいっぱい知ることができた二年間だった。何気なくさりげなく、知らないことや知らない人を受け入れられる柔軟性の大切さは、卒業して年月が経てば経つほど感じている。

三つめは、IBを基軸とする素晴らしい教育だ。日本の高校にいたら到底選ぶことのできない経済や語学の多種多様なクラス。自ら計画を立てて行う物理の実験の数々。本もたくさん読んだ。ひっかけるテストではなく、長時間だけと素直に勉強すれば結果のついてくるテスト、自分の考えを自由に表現できる機会の多い教育は心地よかった。残念ながら、日本の教育はIBやUWCとは程遠い体系だが、どのような場所でも二年間で培った学び方を自分なりにアレンジすることができるようになった。

UWCで学んだ経験つまりは「点」を、自分がこれだ！と思う道つまり「線」にする力を得た気がする。当時から心のどこ

かでおぼろげに考えていた貧困問題。働いて気づく自分の本当の気持ち。手に入れたかったのは富や社会的地位ではなく、やりたいことを突き進む人生だ。

卒業生の課題

帰国してから現在に至るまで、UWC卒業生会日本ネットワークの卒業生たちの存在は私のなかでもとても重要だ。たくさんユニークな卒業生たちが、職種、年齢、大学等を超えて、UWCという強いボンディングで集うこの会はいつも刺激的で、人生のロールモデルとなる先輩にも出会えた。

いま、UWC留学プログラムは財政逼迫で、奨学生の派遣先が削られていく状況にある。卒業生がすでに四〇〇人強のこの会の皆が立ち上がれば、この状況を少しでも改善できるのではと願う。もはや、行動しなくてはならない状況にある。高校生で返済義務のない奨学金をありがたくいただけただけわれには、奨学金とは返済義務のないものという感覚が知らず知らずのうちに芽生えているかもしれない。何の義務もないから何もしなくていいというわけではないだろう。せめて、将来の奨学生を絶やさないように卒業生が力を結束する。いまこそ卒業生が立ち上がらなくてはならないと強く思う。

卒業して七年——熟成される UWCの経験、卒業生としての課題

東洋英和女学院高等部より、二〇〇一年から〇三年UWCSEA（シンガポール校）に留学。〇七年国際基督教大学教養学部理学科卒業。〇七年から一〇年ゴールドマンサックス証券に勤務。一〇年四月より、群馬大学医学部医学科二年次へ編入。

UWCの経験が キャリアパスを大きく変えた

サッカーワールドカップのデンマーク戦、オランダ戦を観戦しながら、UWC時代のデンマーク人、オランダ人の友人の顔を見出し、元気にしているかなと思う。同時に、彼らはこの試合を見ながら日本人の私を少しでも思い出してくれているのだろうか、とも思う。UWCシンガポール校を卒業してはや七年。日本の大学で四年間を過ごし、二年半、金融業界で社会人を経験した後、この四月から群馬大学の医学部に編入し再び向こう五年間の大学生活が

群馬大学医学部

藤田華子

ふじた はなこ



始まった。新たなスタートを切ったこの時期に、こうして体験記を寄稿する機会をいただいたことに感謝したい。

昔から、挑戦してみたい！と思ったら、周りがどんなに反対してもチャレンジしてしまう性格だった。UWCは、両親の猛反対のなかでのチャレンジだった。思いが募ると行動に移すその性格はいまも変わらず、金融業界から医学の道へ、社会人から学生へと舞い戻った。人生をかけてやりたいと思える仕事を持ちたい、UWCの二年間で得た経験と素晴らしい教育を社会に還元しなければという使命感、そんな思いがクロスしたのが医療という金融とは似ても似つ

●ユナイテッド・ワールド・カレッジ(UWC)日本協会は、世界各国から派遣されてくる生徒たちとの教育体験の共有により、国際感覚豊かな人材を養成するという理念を掲げるUWCの日本委員会として、毎年一〇名前後の高校二年生を世界各地にあるUWC傘下の高校に派遣し、すでに四三四名の卒業生を輩出している。

かない世界だった。目指すは、国際協力師(注)助かるべき子どもたちの命を少しでも助けることのできる医師。少し遠回りをしたが、いまやっとスタート地点に立てた気がする。UWCで知った世界の貧困、自分が変わることができるというUWCの経験で得た感覚が、私のキャリアパスを大きく変えた。さまざまな二年間の経験の「点」が、「線」になりつつある。

学んだのは必死にがんばること。 多様な文化・価値観を知り、 自由に考えを表現すること

UWCの経験から学んだことは大別して三つある。一つは、がんばれば自分とは変わることができるという自信。これは、英語の習得から感じたものだ。集合時間と場所すら聞き取れなかった日々から、IB(インターナショナルバカロレア)の試験をこなすまでに成長した。必死にがんばれば何とかなるというあの感覚が、いまも人生の

(注)国際協力師：プロとして収入を持ちながら、専門技術を活かして国際協力を持続的に担う専門家。NPO法人「宇宙船地球号」事務局長、元「国境なき医師団」日本理事の山本敏晴氏が提唱した